青森港開港 400 年　ステンドグラス風ねぶた絵

ステンドグラス風ねぶた絵は、ステンドグラスの美を融合させたねぶた絵です。ここでは、2025 年の青森港開港 400 年にちなみ、沖合から望む時と光の移り変わりを 3 部構成で表現しています。眼下に広がる実景とともに、先人たちが積み重ねてきた歴史のロマンを感じてください。

ストーリーと原画（実際のステンドグラス風ねぶた絵ではありません。）

1. 善知鳥村の朝　Morning of Uto village

青森市は、かつては善知鳥（うとう）村と呼ばれた小漁村でした。舞い飛ぶ海鳥・善知鳥は、「ウトウ」「ヤスカタ」と鳴くと言われ、青森市安方に鎮座する善知鳥神社の由緒となっています。八甲田山の右手前に見える丘には松が青々と生い茂り、港を目指す舟の目印になったため、のちに津軽藩はこの港を「青森」と名づけました。

2. 北前船集う真昼　Kitamae-ships gathering at noon

津軽藩 2 代藩主津軽信枚公から築港奉行を命じられたのは、藩士森山弥七郎でした。弥七郎は港を築造し、大町・浜町・米町の町割りを行い、寛永 2 年（1625）に開港を迎えました。北前船で北陸や京大阪から多くの人々が集まり、大いににぎわったといいます。絵は、大型北前船が群れ集う青森港を眺める弥七郎の姿です。

3. ねぶた海上運行の夕べ　Nebuta -oating evening

商港として栄えた青森港は、廃藩置県とともに行政経済の中心となり、明治 41 年（1908）の青函連絡船就航で、交通の要衝としての役割が一層高まりました。現在も国の重要港湾としての貢献度は変わりません。絵は、ねぶた祭最終日の海上運行と花火大会の情景。毎年寄港する大型クルーズ船が、国際交流の輪を広げています。